

キリスト教と武道 - パラドックスの世界を尋ねる

神谷 昌宏

講座の概要

聖書に散見する一見矛盾と思われるみ言葉が、多くの点でいわゆる武士道と言われる日本人がはぐくんできた思想と共鳴する。本講座では1教程2時間単位を基準とし、最初の授業で聖書と武道の伝書の共通する文言を提起し、その真意を理解するためのサジェスチョンを指導者が行い、次の授業で生徒たちのレポートを基に意見の交換を行い、ディスカッション形式で理解を深め最終的には聖書に言う「神の義と、永遠の命に至る道」について考える。初期ガイダンス1時間を含め29回講座となる。（'03年度は20回講座となる予定）

募集生徒は柔道・薙刀・空手・剣道など武道経験者が望ましい。人員30名程度。

緒言

「キリスト教と剣道とは相容れないものではないか」と訪ねられることがある。これは道場に神棚があったりするためにそのような印象をお持ちになるのだと思う。

しかし「聖書と剣道の教えるところとは、深いところで相通じる」と言うことを検証してみたいと思う。

キリスト教はじめ、あらゆる宗教は死を以て我々に迫って来る。我々はすべて生を受けた以上必ず肉体的死を迎える。それをどう捉え、また処して行くか、と言うのが宗教の一番大きなテーマのひとつである。真言・天台密教しかり、浄土思想しかり、輪廻転生思想しかり、禅しかり、またイスラム教や、ヒンドゥー教、古代エジプトのラー神やアメン神など、さらにもっと遡り古代宗教と言われる自然崇拜に至るまで、そして逆に現代の新興宗教であるオウム真理教でさえ例外ではない。

話は少し横道にそれるが、歴史的に戦乱の変遷を概観すると、391年 倭軍が百済・新羅を破るとというのが具体的に記録に残る最初の争乱である、以降国内に於いてもまた、対外的にも剣を交える戦いは数多く、代表的なものだけでも飛鳥時代の壬申の乱、奈良時代には藤原広嗣の乱、平安時代には源平の合戦、鎌倉時代には元寇、南北朝の動乱を経て室町時代には応仁の乱、同時代末期には長尾影虎と武田信玄の川中島の合戦、そして織田信長が今川義元を破る桶狭間の戦いを始めに、安土桃山時代に突入、諸国群雄割拠となり、天下争乱の状況となる。豊臣秀吉、徳川家康により天下統一がなされるのであるが、最終的

にそのような争乱の最後のものと言えるのが、1615年の大阪夏の陣である。このように人々は殺戮の耐えない日々を送っていた。特に当事者である武士達は、現代の我々より、もっと身近に、また深く死について考えていたことは想像に難くない。それでは彼らはどのように日々死に直面し処していたのであろうか。

キリスト教伝来以前にあって、剣術の創始者達は、山にこもり、また神仏に願を掛けて、苦心^{くしんきんたん}惨憺、本当に命を掛けてようやく剣の極意を開眼した。従って例えば「香取神道流^{かとりしんどうりゅう}」などというような神懸^がかり的な流派の名前を付けたものが多い。結局は死を究極の所まで見つめた結果であると言える。柳生石舟斎、塚原^{ほく}ト伝、鐘巻^{かねまき}自斎^{じさい}などもそういう修行を通して一流^{おこ}を興したのである。

一方キリスト教が日本に入って来たのは、1549年フランシスコ＝ザビエルが鹿児島に上陸し、平戸・山口・京都などで布教したのが始まりである。さらに1551年ガスパル＝ビレラが来日、上洛し布教を始める。織田信長の桶狭間の戦いの11年前に布教の第一歩が始まったことになる。当時の布教活動に関する記録はルイス＝フロイスの「日本史」に詳しい。以降豊臣秀吉がバテレン追放令を出す、1587年までの約40年の間に、宣教の福音にふれた多くの人たちが、信仰を持った。これは一般の庶民だけでなく、武士達も例外ではなかった。むしろ武士達の方がより速く、より深くキリスト教の教理を理解し、傾倒していったかのように思える。九州の大友・大村・有馬の3大名は1582年天正遣欧使節をローマに派遣している。ヴァリアーニがこの使節を再び日本に送り返してきたのが9年後、1590年であるが、そのときにはすでに秀吉によってバテレン追放令が出されていた。この3氏以外にも高山右近、小西行長、黒田如水^{じょすい}など多くの大名を始め、明智光秀の娘、細川ガラシャなどの婦人達も入信している。

歴史に「もし」は禁物であるが、江戸幕府が1612年禁教令を出さなければ、布教活動は、現代日本におけるそれよりも、もっと速く進み、また福音に触れた多くの者が、信仰を持つに至ったであろう。禁教令が出されてからも、信徒たちの信仰は揺るぐことはない。一例としては1637年、禁教令より24年もたってからの島原の乱を取り上げることができる。これは島原城主松倉氏と天草領主寺沢氏のキリスト教弾圧に対する農民一揆であった。

さて1615年の大阪夏の陣や上述の島原の乱以降、世の中は太平となり、実戦で刀を振り回し、截相^{きりあい}をするなどと言うことは幕末までなくなった。唯一の例外的といえる事例が、

元禄太平記でおなじみの忠臣蔵の討ち入りである。47名もの者たちが、米澤藩・上杉家の家臣の警備する吉良邸に討ち入り、実戦の截相を行ったのである。

この太平の江戸時代に、キリスト教の福音に触れることのできなかつた剣の宗家達は、どのように流派を守り、改善し、普遍的な勝利を得るための方策を練ったのであろうか。日本の2大流派である、柳生新陰流と小野派一刀流を中心に取り上げて、聖書の教えと比較してみたい。両流派とも徳川將軍家剣道指南役である。

1 生と死のパラドックス 1 -

- おほよそ己が生命を全うせんとする者は、これを失ひ、失う者は、之を保つべし。

聖書ルカによる福音書 17章33節 (文語訳)

- その心得はまず我が心を自ら切り落とすのである。死にたくない、打たれたくないという我が心を切り落とすのである。

小野派一刀流極意 「一つ勝 / 切り落とし」

2 生と死のパラドックス 2 -

- 自分の敵を愛し、迫害する者のために祈れ。

聖書マタイによる福音書 5章44節

- 「活人剣」敵の好むところに従って勝つ。

柳生新陰流

- 一刀兩段

柳生新陰流

3 生と死のパラドックス 3 -

- 一粒の麦がもし、地に落ちて死ななければ、それは一つのみです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。自分の命を愛する者はそれを失ひ、この世で、その命を愛する者はそれを保って永遠の命に至る。

聖書ヨハネによる福音書 12章24～25節

- 妙剣は「木」に象る初めは切っ先を秘して隠剣に構える。木の種子を深く土中に蔵する所である。自らの肩に隙を見せ、相手に自分の命を捧げる気位を持つ。

4 キリストの愛と武道の愛

- 心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くして主を愛し、また隣人をあなた自身のように愛せ、

聖書マルコによる福音書 12章33節

- 完全な愛は恐れをとり除く、恐れには懲らしめが伴い、かつ恐れる者には、愛が全うされていないからである。

聖書ヨハネの第1の手紙 4勝8節

- 相手に我が心をすべて捧げよ、

柳生十兵衛三厳 「月之抄」真の棒心^{ぼうしん}”

5 愛と礼

- 愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばず真理を喜びます。

聖書 コリント人への手紙 第1 13章3～5節

- 礼は寛容であって、人の利をはかる。礼は妬^{ねた}まず、誇^{ほこ}らず、たかぶらず、非礼を行わず、自分の利益を求めず、軽々しく怒らず、人の悪を思わない。

礼儀はもし上品でないとと思われることを恐れるだけで実行されるならばそれは徳とはいえない。まことの礼儀は他人の感情を察する同情的な思いやりが外に表れたものである。

新渡戸^{にんとべいしやう}稲造 「武士道」”礼”

- 剣道稽古に必須な礼儀という正しい形式によって真心が養われ、真心によって正しい礼の形式が修められる。真心のない形式は虚礼であり、形式の正しくない表現は失礼である。

小野派一刀流極意

6 道 程

- 忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。

聖書 ローマ人への手紙 5章4～5節

- 誘惑に陥らないように、目を覚まして、祈っていなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。

聖書 マタイによる福音書 26章41節

- 一刀流の執行(修行)の要諦はこの生死の分かれ目を出入馳駆しながら、生死の速逸を取り極めて日常心根体技に励み鍛えることである。我欲の重荷を背負う罪人には極楽は百万億土の遠いところにあり、すべてを払捨し捧げて身軽な聖徒には天国がすぐ近くにある。

小野派一刀流極意

7 憐れみ

- 柔和な人たちは幸いである、彼らは地を受け継ぐであろう。

聖書 マタイによる福音書 5章5節

- 憐れみ深い者は幸いです。その人は憐れみを受けるからです。

聖書 マタイによる福音書 5章7節

- 憐れみとは、愛と同情が一つになったもので、相手の気持ちを、自分の気持ちとすると言う。激しさ、荒々しさを越えて、柔らかく、円く、穏やかに相手の立場を考えられる者が、自己に勝ち、悪に勝ち、人を殺す剣を人を生かす剣に変えられる。一刀流の究極は円満である。

小野派一刀流宗家解説

- 流露無碍

小野派一刀流極意

8 仕える

- あなた方の中で、人の先に立ちたいと思う者は、みなしもべになりなさい。人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためである[マルコ 10:44、45]

聖書 マルコによる福音書 10章44～45節

- そこで、あなたがたのうちでいちばん偉い者は、仕える人でなければならない。だれでも自分を高くするものは低くされ、自分を低くするものは高くされるであろう。

聖書 マタイによる福音書 第22章11～12節

- しかしあなたがたは、そうであってはならない。かえって、あなたがたの中で、いちばん偉い人はいちばん若い者のように、指導する人は仕える者のようになるべきである。

ルカによる福音書 第22章 26節

9 巖の身 - 宮本武蔵の剣理

- × 目には目を、歯には歯を[マタイ 5:38]

聖書 マタイによる福音書 5章38節

- × あなたの隣人を愛し、あなたの敵を憎め[マタイ 5:43]

聖書 マタイによる福音書 5章43節

- 剣術 / 剣法の概念

- 諸流派 いわゆる「殺人刀」一つ一つの場面に応じた刀法。

- 孫子 「兵は詭道(あざむくこと)なり」

- 自分の技量を頼み相手を圧倒して勝つ。

「五輪の書」”巖の身”

- 太陽、傾斜、床柱を背に、刀長を計る等々

宮本 武蔵 「独行道」

10 息

- その後、神である主は、土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった

旧約聖書 創世記 2章7節

- 心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう。

- 数息観 / 呼吸即心、心即呼吸

直心影流法定の形

11 心

- 最後に、兄弟たち、すべての真実なこと、すべての誉れあること、すべての正しいこと、すべての清いこと、すべての愛すべきこと、すべての評判の良いこと、そのほか徳と言われること、称賛に値することがあるならば、そのようなことに心を留めなさい。

聖書 ビリビ人への手紙 4章8節

- この命令は、きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛を、目標としています。

聖書 テモテ人への第1の手紙 1章5節

- 其れ剣は心なり、心正しからざれば剣また正しからず。すべからく剣を学ばんと欲する者は先ず心より学ぶべし
剣士 島田虎之助

12 知恵のむなしさ

- 「わたしは知者の知恵を滅ぼし、 / 賢い者の賢さをむなししいものにする」
聖書 コリント人への第1の手紙 1章18節
- 「因心因氣者未也。不因心不因氣者未也。知不有知慮不有慮竊識而化骨。化骨識矣」
『闘戦経』

13 修行と救い

- あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。
エペソ人への手紙 2章8節
- 洞山五位の公案正中編、編中正、正中来、兼中至、兼中到
一刀正伝無刀流 高上極意五点

14 死の克服 / 義の諸相

- 死は勝利にのまれてしまった。死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。死よ、おまえのとげは、どこにあるのか。死のとげは罪である。罪の力は律法である。
コリント人への第1の手紙 15章55・56節
- わたしがすでにそれを得たとか、すでに完全な者になっているとか言うのではなく、ただ捕えようとして追い求めているのである。そうするのは、キリスト・イエスによって捕えられているからである。
ピリピ人への手紙3章12節
- 我らが人生のたいていの問題は武士道をもって解決する。正直なること、高潔なること、寛大なること、約束を守ること、借金せざること、逃げる敵を追わぬこと、これらのことについて(武士道が)キリスト教を煩^{わづら}わすの必要はない、我らは先祖伝来の武士道により、これらの問題を解決して誤らない、ただし神の義につき、未来の審判につき、そしてこれに対する道につき、武士道は教うる所がない。
内村

